



## メディア融合の新展開

慶應義塾大学教授 なかむら いちや  
中村 伊知哉



皆さんこんばんは。ちょっとしゃべれと言われたのでこのこやって来ましたが、大先輩方がたくさんおられて急に緊張しています。まともな話ができないものですから、どうしようかなと。

### 1. これまでのニューメディア

私は1984年に役所に入りまして、大先輩がおられた電気通信事業部に配属されました。ですから通信自由化前夜、公衆電気通信法をいじった最後の世代になります。その役所に入る1年前に、近所の会社が図1のような機械を作って、世界に売り出しました。この機械が世界の茶の間を変えました。映像で遊ぶことができるようになったんですね。

それまで映像というのは、テレビで見るか映画館で見るしかなかったのですが、この機械、ファミコンによって映像で遊ぶこと、インタラクティブにいじることができるようになった。その頃からテレビや電話以外の新しいメディアがどんどん開発されて、普及するようになりました。当時、ニューメディアと呼んでいました。

それから通信自由化も10年たって、1993年にこんなことがありました。アメリカでブッシュさんのお父さんからクリントンに政権交代。共和党から民主党ですね。日本でもこの年に宮沢さんから細川さんに政権交代がありました。

その頃、日本はバブルがはじけて非常に景気が悪くて、何か出口がないかなと言っていたのですが、クリントンという人がこれからは情報スーパーハイウェイだと言い出した。何



図1. 1983年に売り出されたファミコン

のことが分からなかったのですが、日本も何か言おうということで、マルチメディアと盛んに唱えていました。その時期には投資が結構そういう分野に集中して、その翌年、94年あたりから携帯端末の解禁などもあって、パソコンやモバイルが一斉に急速に普及を始めました。

### 2. 第4のメディア

それから15年たちました。2009年、ブッシュからオバマに政権交代。また共和党から民主党です。日本も麻生さんから鳩山さんへと変わりました。日本もまた同じような政権交代ですね。そして景気が悪い、何とかしなければいけないというときに、アメリカはまたしてもICTだとかデジタルだとか言っています。では日本はどうするかというのが今年の課題だったと思います。

何か起こるんでしょうね。多分もう起きているんです。テレビが普及して50年、そしてパソコンや携帯の15年というのがあって、その次が来ようとしているということです。

テレビ、パソコン、携帯の次、つまりいわゆる第4のメディアと呼べるようなものが、一斉に普及を始めました。スマートフォンであったり、電子書籍リーダーであったり、あるいはスマートパッド、あるいは大きなディスプレイ、デジタルサイネージのようなもの。こうした4種類のものが、一斉に世界的に普及を始めています。

これは見る人によって捉え方が全然違います。例えば広告マーケティング業界の人は「ああ、デジタルサイネージのことですね」と言いますし、出版業界の人は「今年は電子書籍元年ですね」と言います。教育分野の人は「デジタル教科書ですね」と言います。みんな違うことを言っているように見えて、実は同じなんです。これは全部、後ろでネットワークでつながっている、ネットワークメディアだということです。

ただ、こうした4種類のものがアメリカから一斉に入ってきているので、黒船だと騒いでいる人もいて、「たった四杯で夜も眠れず」。そこで今年は総務省、経済産業省、文科省という御三家(?)が鳩首会合をしていたということだったのではないかと思えます。



### 3. 進んでいる日本の若者

私は日本は進んでいると思っています。例えば携帯です。10年前日本の高校生は、携帯で親指で読み書きをしていました。そんな国は他にはありませんでした。

欧米に行くと、スマートフォンが普及してきているとはいえ、いまだに携帯というのは電話機であり、耳と口のメディアですが、日本や韓国ではもう10年ぐらい前から指と目の読み書きのメディアに変わってきています。これはこれからどんどん強みを発揮していくでしょう。

96%、つまりほぼすべての高校生が携帯を持っている国なんて、他にはありません。70%の高校生が音楽をダウンロードし、半分近くの子がブログを持っているなどという国はありません。しかもSNSとかブログぐらいだったら私でも分かるのですが、「私、プロフやってる」とか「リアルやってる」と言われると、もう全然ついていけない。つまり、そういう状況に進化しているということだろうと思います。

高機能のビデオカメラと次世代の携帯端末とをドッキングすると、テレビ局の中継車並みの機能をみんなが持ち歩くようになる。「1億人の歩くテレビ局が、日本では世界に先駆けてできますよ」などと言っていたのです。

これは3年ぐらい前のアメリカの調査会社が出した結論ですけれども、世界中のブログで使われている言葉のデータを総計すると、日本語が37%で、英語の33%を抜いてしまったというのです。つまり世界中のネットの上で流れている言語の中で、日本語が一番多いということです。皆さんお気づきではないかもしれませんが、若い世代が携帯で、ずっと文字をアップロードし続けているということです。

### 4. 制度の見直し

そうした分野を加速していくために、この4年ほどかけて、例えば制度も直して、通信放送の制度を改めて情報通信法のようなものがないか議論してきました。これがやっと先頃の国会で、放送法等の一部改正法案ということで成立をみました。関係の皆さんの御努力に心から敬意を表します。

我々がそうした議論をこの段階でやらなければいけないと言っていたのは、何か眼目だったかという、規制緩和です。つまり地デジが整備され、ブロードバンドが整備され、融合メディアが出てくる、その後の環境をもう整えておかなければいけない。

例えば、テレビ局が昼間、テレビ向けの放送をやっている、

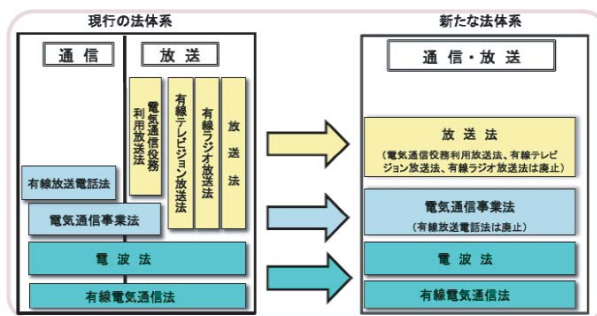


図2. 情報通信法の流れ

晩にはもっと電波を効率的に利用して通信会社などと組んで通信をやろうとしても、今の制度ではできない。できないことはまだたくさんあって、もうそろそろそういったものを解決していいのではないかという議論でした。

ただ、それはもう次のコマに進んでいるので、いよいよ民間の側で新しいメディアを作っていく。アメリカのまねではない、新しいものを作っていこうという動きをしなければいけないのではないかと。そんな心意気でいます。

### 5. デジタルサイネージ

私が携わっている二つの新しいメディアプロジェクトを、簡単に紹介しておきます。デジタルサイネージとデジタル教科書です。デジタルサイネージは電子看板と言ったほうがまだ通りがいいかもしれません。これは東京ミッドタウンです。103インチのプラズマがつながっているのですが、こうしたディスプレイがミッドタウンだけで150台あって、全部、ブロードバンドでつながっています。町中をつなぐインターネットメディアです。

JR東日本さんのトレインチャンネルは、東日本だけで2万ディスプレイがあって、それが全部、ずっとコンテンツがつながっている。見ている人が多いですから、恐らくローカルテレビ局よりも強い訴求力を今、持っている。そういう新しいメディアが出てきています。これを一つの大きな産業、1兆円ぐらいのニューメディア産業にしたいということで、コンソーシアムができています。170社ぐらいが集まって、新しいビジネスの開発などを行っています。

そうした中で、日本型の新しいサイネージサービスを作っていこうという取組が始まっています。例えば自動販売機。日本は自動販売機大国で、国内に600万台ぐらいあります。全部電気がついていて、ディスプレイになってくる。それをつないでいこう、世界に打って出ていこうと。



図3. 東京ミッドタウンのサイネージ



図4. 神田の街でサイネージと携帯の連動実験

あるいは携帯との連動。図4は神田の商店街ですが、放送の電波でコンテンツを受けて、ぐるぐる動かして、フェリカタッチでクーポンなどを手元まで持ってくると、歩いていた人がお店に足を運ぶかもしれない。そこにお金も動くといった、サイネージと携帯との連動みたいな実験をやっています。

## 6. デジタル教科書

次はデジタル教科書です。今年政府はやっと、2020年にすべての子どもたちをデジタル環境で教育できるようにするという計画を立てました。やっとです。民間の受け皿を作ろうということで今年の7月にコンソーシアムを作ることになりました。そこで新しい教材の開発などを進めようとしています。政府の側も動いて、総務省が実験として今、10の小学校を選び、そこで1人に1台の端末を配っての実験を進めています。やっと日本は本格的な動きになってきたのですが、とても遅かったです。

図5はMITメディアラボというところで作っている、100ドルパソコンと呼ばれるとても安いパソコンで、インターネット端末です。途上国を含む世界中のすべての子どもたちに、こうしたものを持たせてデジタル教育に触れさせようという

プロジェクトです。

実は最初の青写真が図6で、2001年7月と日付がある。ほぼ10年前ですね。これを最初に作ってMITでプレゼンしたのが、アスキーの創業者の西さんと私の2人です。こういうのをやったらどうですかとプレゼンしたら、MITもそれはいいと言って、アメリカの政府と組んですぐに各国の文部省などを巻き込み、プロジェクトにしていきました。

今、これを世界35万人の子どもたちが使っています。ウルグアイではもうすべての子どもたちがこれで勉強しています。同じこの紙を持って当時文部省に行って、同じプレゼンをしたのですが、「何をふざけたことを言っているんだ」と追返されました。それから10年たってやっと、日本政府も動き出したという状況です。

実は先ほど日本は2020年と言いましたが、韓国は2013年に全員に配る。もうやってしまうということで、どんどん進めています。聞くところでは、フランスは来年全員にやりたいと言っています。だとすると、10年ぐらいの教育の情報化の開きが出てくる。

これを何とかしなければいけないということで、先ほどこの協議会の新しい目標を作ろうということで、政府の目標を、5年前倒しにして2015年でどうかと。2015年にすべての



図5. 100ドルパソコン

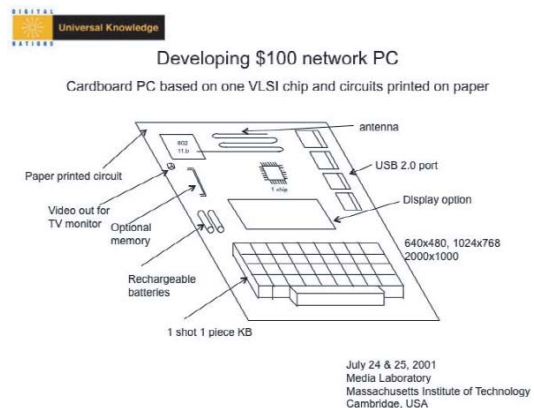


図6. 100ドルパソコンの青写真





子どもたち、小中学生に情報端末を持たせて、コンテンツもそろえていこうという計画を立てて、発表をしてきたところ。市場も待っているかと思えます。

## 7. デジタルの利活用

我々はそれ以上に、もっとデジタルというものをすべての世代の人たちが使って、何を生んでいくのかということをやっていくほうが大事ではないか。デジタルはしょせんは道具なので、その道具で何を生んでいくのが大事ではないかと思っております。同時に子どもたちが新しい技術を使ってアニメを作るとか、音楽を作るとか、そうしたワークショップを8年ほどやり続けています。そうした新しい授業や活用法、利活用という言葉もありますが、そうしたものの開発もしています。

これは小学校3年生の男の子3人が、1日でポンポンと作り出したアニメです。粘土をこねて、パソコンで編集して音楽を入れたりするということをやったものです。日本の子はこういうことをさせると抜群にうまいです。アメリカでもヨーロッパでもアジアでも南米でも、いろいろなところでこういうのをやっているのですが、全然レベルが違う。多分、これが今日日本が持っている、一番の競争力といえますか、リテラシーのところですね。こういうのを生かしていけばいいのではないかと。

そうした活動が日本は実は進んでいます。デジタルを使ってモノを作るという活動です。いろいろ集めてきて、ワークショップの形で、ワークショップコレクションという催しもやっています。今年2月に慶應義塾で80件ぐらい集めてやり、3万5000人もの子どもたちが集まりました。結構そうしたものに對するニーズも高まっていて、今度の2月にもやろうと思っているので、もし御興味があれば御覧いただければと思います。

## 8. コンテンツ力で世界に進出

最後に御紹介したいのは、そうしたネットワークが整備されて世界にコンテンツをどう発揮していくかという、コンテンツ力です。クールジャパンなどとも呼ばれておりますが、その競争力をどう発揮していくのかということだろうと思えます。

今の政府の目標として、2020年までにはあと1兆円ぐらいのアジア向けのコンテンツ市場、ポップカルチャー市場を作りたいということで活動が始まっています。恐らく皆さんが想像している以上に、日本のコンテンツやポップカルチャー、漫画、アニメ、ゲーム、そういうものですが、世界に進出しています。

毎年パリで、ジャパンエキスポという日本のコンテンツのイベントが開かれます。今年の7月に行ってみたら、18万人の若い人たち、日本のアニメや漫画のコスプレをしているわけです。驚いたのは、日本の女子高生の格好をした子たちが結構多いのです。

聞くところによると、アメリカでは最近、日本のお菓子ブームというのが起きているらしくて、日本のお菓子がネットでかなり売れているというのです。日本のお菓子は、まず第一においしいのです。モノ作りの力があって、日本のお菓子は一口食べて「ああ、おいしいね」と分かる。

もう一つは、デザインやパッケージとかが変なんです。アメリカではこんなお菓子を作ろうとはしません。そういうモノ作りの力とコンテンツ、文化の力が組み合わさったところに、ネットで簡単にお菓子を買えるようになった。日本食料品店に行かなくても買える。その三つですね。モノ作りとコンテンツとネットの力で、何か新しいビジネスが出てきそうだとということで、このあたりが来年ぐらいからのチャンスではないかと。

## 9. 「学」の強化が必要

最後に一つだけ。日本は、官は一生懸命頑張っている今仕事をしていると私は思います。それから産、産業界ももちろん世界と戦っています。産官学といったときの学の問題があるのではないかと、私は思っております。私は今、学身に置いているのですが、そこを何とかしなければいけないのではないかとというのが自分のテーマです。

例えばSun Microsystemsという買収された会社がありますが、これはStanford University Networkの略語だというのは御存じですか。ヤフーもグーグルも、スタンフォードのPh.D.の学生が作りました。マイクロソフトもフェイスブックも、ハーバードの学生が生まれました。電子書籍で使われているE・INKはMITメディアラボからのスピンオフ。

では、日本はどうか。日本が世界に張り合うような素晴らしいものは、いろいろ生まれてきています。世界にどんどん出て行っていますが、学は何かこれに貢献したのかということ、うーんと首をひねらざるを得ない。日々偉そうなことを私も外で最近、言っていますけれども、自分自身のところを何とか強化しなければいけないと思っておりますので、皆さんに引き続き御指導をいただければと思います。御清聴ありがとうございました。

(2010年12月10日 第39回ITUクラブ総会より)